

家庭科教育

「教育研究集会だからこそできる討論」の追究

岩佐美和子

I. はじめに

分科会は、冒頭、共同研究者である増渕哲子氏（北海道教育大学札幌校）より、2015年8月26日に行われた中教審初等中等教育分科会での報告資料を基に、「次期改訂 何を検討しているのか」というテーマで、現段階で文科省がおさえしている家庭科教育に関する児童生徒の意識や教師の指導の現状について、また、高等学校における新科目「公共」（仮称）との関連性についての情報提供がなされた。

その後、同じく共同研修者である青木香保里氏（愛知教育大学）より、基調提案がなされた。前年度の合同教育研究集会の成果や課題を振り返るとともに、教育研究集会だからこそしなければならない問題へのアプローチや、生活にかかわる技術の取得を、たとえば災害時の対応などといった現代的な問題と合わせてとらえなおすことの必要性、健康な生活を個人の幸せや人間の尊重といった視点でとらえることなどの重要性を踏まえ、「家庭科で何をどのように教えるか／学ぶか」を深める分科会にしようとの提起があった。

参加者は2日間で延べ二十人、レポート4本の報告があった。

以下、レポート報告に基づき、成果と課題を述べる。

II. 実践報告

1 「～食の背景が見える取り組み～」

（桧山・せたな町立大成中学校 日下恵子）

実践者が勤務する町は北海道内外の外来漁船の陸揚げ拠点となっている漁業の町であり、町では「海」資源の教育的利用と交流活動の取り組みを推進している。実践者は、この取り組みの2年目の年に赴任し、前年度の取り組みについて、教師の評価と、「自分の口にあう食べ物ではなかった」という生徒の感触に大きな開きがあることを感じ、単に「地域の食材を扱うという位置づけだけでは深い学習にはならない」と思ったと述べている。その後の3年間は、家庭科の授業で、町の漁業の担当者から、地域の漁業の様子を話してもらい、理解と関心を深めた後に、実習を行うというスタイルをとってきた。生徒たちは築地市場での高値の取引などを知り、「改めて地域の漁業を見直し」た後、バカ貝のクリームパスタやホッケのフライなどの調理実習に取り組んできた。

2015年度は、実践者が1年生の総合である「地域産業学習会」を担当することになり、実践者が以前より感じていた「漁獲物を得る体験を通じて漁業の実際を体験させたい」という、内容を広げた取り組みが可能になった。担当者との相談により、「ツブ籠漁」を体験させようということになった。

[計画]

- ① 大成の漁業についての講話の後、海岸に移動し、籠にエサを仕掛けて海に投入する
- ② 2日後に籠を引き上げ、獲れたツブは3日間ドロを吐かせる
- ③ ドロ吐きを終えたツブを刺身にして食する。

3つの班に分かれてエサのサメを仕掛けたツブ籠を投入したところ、ツブがたくさん入り、翌日に引き上げを行うことになったが、波が高く、緊張しながらの作業となった。生徒たちは籠ごとにツブの量に違いがあることにも興味を持っていた。調理では、生きているツブの殻を金づちで割り、それぞれが「刺身」にし、給食の御飯とともに食した。

実際に体験した生徒は「調理実習ではつぶの貝がらを割るのに、予想以上に力が入り、とてもくろうしました。割れて穴があいたとき、つぶはうごいてびっくりしました。」と感想を述べている。実践者は、殻つきのまま扱う調理法ではなく、「刺身」にすることで「本当に命が迫ってきます」と述べており、生き生きとした生活体験の様子が伝わってくる。

実践者の「地域の食材を扱うという位置づけだけでは深い学習にはならない」という問題意識から、より「命」を感じさせる実習にするための仕掛けは、「何を」「どのように」扱うのかという家庭科教育の課題を私たちに突きつける。

また、実践者は、『食』を考える時、農作物であれば「どこで」「だれが」「どのように育てている」ことを大切にしたいと思ってきました。」と述べている。TPPなど私たちの食が脅かせる問題が迫る中、「食の背景が見える取り組み」はますます重要になっていくものと考えられる。

2 「育てた甜菜で砂糖をつくる」

(小清水高校 内藤しをり)

3年生の選択授業の一つである「生物」の授業で生徒が育てた甜菜を分けてもらい、「フードデザイン」の中で「砂糖づくり」と「素揚げ」に取り組んだ実践報告である。

ビート産業が盛んな地元では、畑で遠目に目にする甜菜であるが、身近な道具を使って実際に砂糖をつくることができるのか、実践者は以前から興味を持っていた。9人という少ない選択者であることから、インターネットなどで作り方や食べ方を調べることから始めた。甜菜から砂糖をつくる実習では皮をむいて切り刻み、70℃の湯に1時間浸して糖分を抽出し、煮詰めていく。煮詰めた砂糖を火からおろし、なべ底をこすっていくうちに結晶ができあがる。実習は2回行ったが、2回目は生徒も「自信をもって」てきぱきと作業するができた。班ごとに砂糖の色も味も様々であり、比較や原因を考えるなどの発展も生まれた。実践者としては「興味があったことをやりきって満足している」「砂糖ができた

ときには、特に教師が感動した」と述べている。

他教科の学習の成果を授業の中で研究し、発展させることができる高校のカリキュラムの柔軟性には、参加者からも驚きの声があがったが、小規模の学校ならではの教師の連携を感じさせる。また、自分たちが調べたことが成功し、教師が感動する様子を目の当たりにした生徒たちはどのような思いを持ったのであろうか。教師は「支援者」という言葉が改めて浮かんでくる実践である。

3. 「生徒同士が話し合う授業を取り入れてみて」

(滝川西高校 福間あゆみ)

次の学習指導要領では、文部科学省が初等・中等教育でのアクティブ・ラーニングを強く推進している。さらに「大学入学希望者学力評価テスト」の記述問題と結び付けた授業改善が実践者の学校でも推進されている。家庭科教育においては、これまでも調べ学習、実習などの体験学習が積極的に行われているため、以前から取り入れられている内容であるとの一方で、実践者の問題意識として、一方的な授業を少し変えていきたいという思いから、3年生の必修科目の単元「子どもとかわる」の中で生徒同士が話し合う授業を取り入れた実践である。

計画は

- (1) 「1 子どもを知る」(2時間)
子どもの主体性を大切にして話しかける※1 (1時間)
- (2) 「保育実習に向けて」(2時間)
- (3) 「保育実習」(3時間)
- (4) 「2 発達のすばらしさ」(5時間)
- (5) 「3 子どもの生活」(4時間)
安全について※2(1時間)
- (6) 「4 親になることを考えよう」(1時間)

「※」部分に導入

※1については、毎年保育実習の際に子どもたちにどのように話しかけたらよいか迷う生徒がいることから、「絵を見て、否定的・指示的ないい方、肯定的・共感的ないい方を考えてみよう！」としてグループでの学習を行い、最後に代表者に発表をしてもらった。「なかなか肯定的に考えるのは難しいけど、とてもよい勉強になったと思います」との感想にあるように、否定的ないい方はすぐ考えやすいようだったが、肯定的な考え方は難しいようであった。

※2については、教科書の「不慮の事故による子供の死亡」を参考に、子どもを不慮の事故から守るために親や大人が気をつけなければならないことをグループで話し合っても

らった。実践者は、「子どもは危険に対する判断力や運動能力が未熟であり、保育者が子どもの生活環境を見直して整備する重要性については理解が深まった」と述べているが、「一方で「常に監視する」「子どもに鈴をつける」「室内で遊ばせる」「GPS携帯を持たせる」という意見に驚きつつも、取り上げて話をするような展開に持っていくことができなかったことを紹介し、「子どもであっても一人の人間であり、大事にしていかなければいけないという方向へつなげられなかったのが非常に残念であった。」としている。初めての生徒同士の話し合いの中でこれまで見えていなかったことが見えてきたことも本実践の成果であろう。

この授業を取り入れてみて、実践者は「保育の分野では、自分の育ってきた環境や経験で考え方が違ってくる分野であると考えている。」「教師主導の授業の時より生徒が主体になった授業の方が、授業に対する目的や計画をはっきりとさせ、様々な知識を持った教師が求められてくると痛感した」とも述べている。

4. 「生活教養」で実生活に役立つ経験を

(雄武高校 岩佐美和子)

実践者は高校3年生の担任をしており、2年生の終わりを迎えても、「生徒たちは人との関わりの中ではまだまだ課題があり、その原因の一つとして経験不足、体験不足による自信のなさがあることを痛感した」と述べている。3年生の選択である学校設定科目「生活教養」の中で様々な体験・実習を組み入れた報告である。

「飲み物のサービス」の実践では、学年の他の選択授業を受けている教室に入り、実際に注文をとって飲み物を出すという体験や、「包丁を使わない朝食づくり」を体験し、一人暮らしについて、考えるといった内容である。

担任としての日常の生徒との関わりにおいても「色々な体験を積みませ、自信を持たせること」の大切さを実感し、これからも「経験を積みさせることにこだわって教育活動を展開していきたい」と結んでいる。

III まとめと次年度の課題

分科会の中で、青木香保里氏より、「被服材料の特性に注目した実習教材の開発と実験授業」として学生とともに開発した衣生活領域の教材「不思議アームカバー」の紹介があった。新しい繊維材料の特性をいかして、子どもがより楽しく確実に技術を習得できるよう工夫された教材である。実際に教材化され、販売に至ったことは、研究の成果がより多くの人に還元されるという点で、学生たちにとっても意義のあることである。

私ごとではあるが、今年度から共同研究者として分科会に関わる中で、感じた課題を自己の大きな反省と次年度の決意を含めて述べ、まとめとしたい。

- (1) 教育研究集会であるからこそできる、しなければならない討論の追求。
- (2) 子どもの姿、子どもの学びの様子が見える形でのレポート作成の工夫と分科会運営。
- (3) 教師の伝えたい、学ばせたいという願いを実現する授業計画と教材の開発。
- (4) 実践の中で見えてきた子どもたち、若者の課題の交流とその解決に向けた家庭科でできる学びの探究。

今年度も大学生の参加があり、その意見は新鮮であった。今後も本質的な議論を積み重ねる中で、参加した学生に集会のよさを伝えられる分科会にしたい。